

白文鳥

白文鳥

網野 菊

土筆社版

檢印
廃止

白文鳥 定価六百円

昭和四十二年十一月十五日 第一刷発行
昭和四十三年四月三十日 第二刷発行

著者 網野菊

発行人 吉倉伸

発行所 土筆社

東京都渋谷区代官山町十番地ノ二十三号

振替口座 東京五四七六六

電話番号 東京461 三六五八

印刷所 合資会社 光明社

東京都港区赤坂九ノ六ノ四十三

目

次

白文鳥	7
小鳥	14
雛鳥	31
文鳥始末記	42
白いチャボ	51
犬たち	62
動物抄	89
野犬	105
仔犬	114
すて猫	128
よその猫	138

あ と が き	が ま 蛙	脛 か ぢ り 猫	猫 い ら ず	二 代 目	仔 猫	老 猫
188	185	180	171	165	156	141

白
文
鳥

白 文 鳥

去年八月初めの或る夕方、ふと窓から庭を見たら、向ひの弟の家の裏口近くの地面に、白い小鳥が来てゐる。小さな水たまりの水をのんでゐるのだ。この辺は町なかでも近くに神社の木の茂みがあったりするので、鶯や尾長や百舌もずなど飛んで来てゐることがあるのだが、捕へようと思つたことはなかった。しかしこの白い小鳥はなんだかつかまへられさうな気がするので、そつと、その白い小鳥のうしろを通つて弟の家の横手の窓へ行つて声をかけると、義妹は留守で、弟が昼寝の幼児たちのそばで本を讀んでゐた。「文鳥らしいのが来てゐるけれど、つかまらないかしら？」と言ふと、弟は、「つかまるもんか」と言ふ。私は諦めて自分の住居へ帰ることにした。小鳥はまだ水をのんでゐる。そこへ弟が出て来た。小鳥は驚いて飛び立ったが空へは飛ばずに

弟の家の中へ飛びこんだ。それで弟はそれまではづしてあつた裏口のガラス戸を急いではめにかかると、小鳥はパツとおもてへ飛び出し、小さい庭を越え、私の家の前のえいしだにとまった。「もう駄目だ」と思つてゐると、小鳥は再び飛び立って、私の家の窓の中へ入つて了つた。おもての窓々をしめ、ドアをしめると、八坪半ほどの私の家はそのまま大きな鳥籠になつた。裏手の窓には金網が張つてあるので、鳥は逃げられない。弟は自転車に乗つて隣り区にある鳥屋へ籠を買ひに行った。私は、幼児二人だけが残つてゐる弟の家のことも心配で、早く弟が帰ればいいと思ひながら、小鳥にパン屑を投げてみたりしてゐた。小鳥はおびえた様子で、私の家中を飛廻り、そして糞うんをしたりしてゐたが、そのうち弟が鳥籠と餌を買つて戻つて来て、小鳥を手でおさへて籠に入れた。弟の家では鼠が出て、以前飼つてゐた小鳥を鼠に食ひ殺されたことがあるといふので、私が飼ふことになつた。私は、その瞬間、「この小鳥はS先生にあげよう」と思つたが、そのことは弟に黙つてゐた。いきもの好きの先生の所にはいろいろの種類の小鳥があるが文鳥はゐなかつた。小鳥は緑の輪を片足にはめてゐるし、その種類上、飼はれてゐたものに相違なく、逃がした家ではどんなにか残念がっ

てゐるに違ひない。しかし私は交番に届けなかった。昔、祖父がカナリヤを飼つてゐた時、カナリヤを逃がしたことがあるけど、別に交番に届けたりしなかったから、この文鳥も届けなくてもいいだらうと思つたのだ。うちでつかまへなかつたら鳶か猫に殺されたかもしれないし…… 白い鳥が飛びこんで来たのはこれが初めてではなかった。戦争中私が罹災後、北沢の父の家にしばらくゐた時、或る日茶の間で用事をしてゐると隣りの台所で何か物音がするので、のぞいてみたら、白い雌のチャボが板の間のまん中にゐる。まったくそれは降つて湧いたやうだった。私は配給当番で近所を廻つた時隣組の中で鶏を飼つてゐる家々で聞いてみたが、どこでもチャボなどゐなくなつた家はなかった。罹災前住んでゐた家の折にも、防火用バケツが欲しいと思つてゐたら、やはり降つて湧いたやうに或る日裏のごみ箱の上に手ごゑな中古バケツが載つてゐて、これも隣組中の家で聞いてみたが、どこの家でもないといふので、私が重宝して使つたものだった。その頃は、バケツだつてなかなか手に入らなかつたから。白チャボは父の手作りの小屋に丁度十日ゐて、一日おきに一つづつ都合五つの卵を生んだが、私の不在中どこかの猫がかかつて殺して了つた。この白い文鳥も、別に私が

かねがね欲しがつてゐたといふものではないけれど、きっと神様が私に下さったものだからと、そんな考へが湧いたりもしたが、しかし、何となく気がとがめてゐたのも事実だ。義妹がデパートの小鳥部で白文鳥の値段を見て来て、高価なものと分つた。私は来客からこの小鳥のことを訊ねられるたび、「交番へ届けなければいけないのでせうけれど」と言ひわけを言つた。私は間もなく一と月ほど家を留守にしたがその間は弟の家の手伝ひの老人が鳥好きで世話をしてくれた。老人は小鳥の水浴み用の陶器を自分の家から持つて来てくれたりした。秋、伊豆のS先生をお訪ねする時ほかに荷物もあつて生きものを持つて行くのは億劫だったし、小鳥についての費用は私持ちでもつかまへたのは弟だったので弟への遠慮もあつて、持たずに行つた。先生に白文鳥のことをお話しして、「交番へ届けなければいけないのでせうけれど……」と、また例の言ひわけをつけると、先生は、「ああ、それは、きつと交番から、言つて来ますよ」とじよう談を言はれ、「オイK子、鳥籠が一つしまつてあつたね。あれを出しておきなさい。どこからか、小鳥を貰ふかもしれないから」とお嬢さんにおっしゃつた。先生は、そして又、先生のおうちに最近とびこんで来た鳥の話をなされた。それ

は結局近くの家で飼ってゐた鳥で飼主が探しに來たので返されたのだが、その話は先生一流の話しぶりで大変面白かった。

私はS先生の「どこからか小鳥を」云々は勿論じよう談とは知ってゐたが、かねがね先生にあげたいと思つてゐたところだったし、先生のおうちの近くに住む同窓先輩のT夫人に話すと、夫人は、「ええ、それは、きっと、先生は欲しくてゐらっしゃるんですよ」と言はれた。それで、私は、それから又二た月後に先生の所へ行く時、白文鳥の籠を風呂敷に包んだが、弟にことわらぬのは悪いと思ひ、言ふと、弟は不服さうな顔をした。彼は幼い子供たちのために手近かの私の所にそれを置いておきたいらしい。それで私は又持たずに伊豆へ行つた。先生は文鳥のことは何もおっしゃらなかった。私も黙つてゐた。

私は白文鳥を交番へ届けないのを氣にして來客たちに言ひわけしいしいしてゐるうちに、或る日まったくのそそっかしさから、家の近くでお金を落とした。あつけない落とし方で、そしてちよつとのまに誰かに拾はれて了つたのだ。白文鳥一羽の値段よりは少し少い金額ではあったが、私は、これを文鳥の代金みたいと思った。そしてそ

れからは、「交番」云々の言ひわけをすることをやめた。ただ、小鳥が一羽でゐるのは如何にも可哀さうで気になるのだが、やはりなかなか買ひ得ない。雛なら安いのでそれを買つて来ようかと思つたこともあるが、文鳥は形のやさしさに似ず性質が烈しくて喧嘩をする由なので、うっかり一緒に出来ないし、第一、雛は餌を食べさせることも世話なので買ひ得なかった。S先生の所では、その後、白文鳥などよりずっと高価な、珍しい小鳥の番ひを逃がして了はれたと聞いた。又、近いうち東京へ転宅をされるにつき、手飼ひの小鳥たちを知人達にあげてをられる由を聞いて、私は、白文鳥を先生にあげないことの自分だけの気のすまなさをすてた。又、雌を買つてやらう——私は緑色の輪や、眼のまはりの赤いことから、飛び込んで来た文鳥は雄に違ひないと思つてゐたので——と氣にすることもやめようと思へるやうになった。その代り可愛がつてやることにして、この頃は時々文鳥をなでてやることにした。私は犬にも小鳥にもあまり愛情を持ちたくないと思ひ続けてゐたのだが、最近、飼犬が死んだら、可愛がつてゐなかつたことが氣になつて、変に淋しくなつて困つた。そんなことから、以前より、小鳥に慰めを求める氣も強くなつたのだ。小鳥は、毎朝、私が近

づくと、ちゃんと撫でられるのを待つ姿勢をする。飼ってから一年四カ月たつ十二月に入つて十日をすぎた朝、ふと気づくと、鳥籠の中で小さな卵がとまり木のそばに生み落とされて割れてゐる。私はそれを見て驚き、且つ、をかしくなった。雄だとばかり思つてゐたのが卵を生んだので…… さう言へば弟が、「この鳥は雌らしい」と言つたことがある、私はその時、緑の輪や臉の赤さを言ひ立て、「雄だ」と主張したのだった。雌を買つてあてがはなくてよかつた…… 一年近い間、雌を雄と思ひこんでゐたなんて…… 卵を生んだのを見た後でさへまだ、本当に雌なのかしらと疑ひたくなるほどだ。人間界では性の転換などといふことがこの頃よくあるので…… 女ひとりの世帯に、私が引越して来る前からここにゐてゐて先日死んだ犬も牝だったし、飛び込んで来た小鳥も結局雌だった…… 私は神様からかはれたやうな感じがし、飼犬の死その他で憂鬱になつてゐた気持ちがほぐされた。又そんな無精卵を生んだ小鳥が哀れにもなつて、今度こそは文鳥についての本なども読んで、この鳥のことをもっと詳しく知つた上で雄鳥を買つて番ひにしてやることを心がけようと思つた。

（昭和二十九年十二月）

小 鳥

窓から飛び込んで来た白文鳥を、雄とばかり思ひこんで一年以上たつうち、思ひがけなく卵を一つ生み落としたことから、雄ではなくて雌だったと分り、そんな無精卵など生んだことが哀れで、今度こそは雄を買って番ひにしてやらうと思つてゐるといふ文章を同窓会の機関紙に書いたら、何十年もの間手紙のやりとりなどしたことのない同窓の大先輩で遠い地方で学校を經營してゐるK女史から、「小鳥の御成婚を祈ります」と書き添へられた年始状を貰つた。私は、K女史が母校で教へてゐた時分は、学生で女史に学課を教はつたことはなかったが、信州高原の夏期寮で幾日かの間世話になつた。私はK女史の小柄なきびきびした身のこなしや、親切でさっぱりした性質に好意を持つてゐた。K女史は結婚したが愛児を失つた衝撃から夫君と別れて遠